

月刊

いっしょのとも

第十一卷

三月号

子どもの自殺の原因

現代に

子どもの自殺

なぜ増える

愛を失い

信なくし

すべてを自己の

責任で

解決せまる

孤（個）の世界

子どものこころ

持ちこたえ得ぬ

聖者の教えの喪失

新世紀

歴史の未来

見通せず

不安を懐く

人多し

聖者の教え

失いし罰

人生を考え直して

みたい人は（七四）

『正法眼蔵』解説（一八）

有時（うじ）の巻を続けます。

われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭頭物物（ずもつもつ）を時時なりと見（ちよけん）すべし。物物の相（あい）礙（げ）せざるは、時時の相礙せざるがごとし。このゆゑに、同時発心あり、同心発時あり。および修行成道もかくのごとし。われを排列して、われこれを見るなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。

これまで通り、参考までに現代語訳として、玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）のものを引用させていただきます。

世界全体というのは、実はわれがすきまなく配列されたものである。このような世界全体の、その時その時の事々物々を、時そのものであると見なすべきである。事々物々がたがいさまたげ合わないの

は、それぞれの時がさまたげ合わないのと同じである。このゆゑに、同時にそれぞれが発心（菩提心をおこすこと）することもあり、また同じ心で、それぞれの時に発心することもある。そして修行や仏道を成就することについても同様である。われを配列しておきながら、自分がそれを見ているのである。自己がすなわち時であるという道理は、まさにこのようなものである。

この現代語訳を読んで頂いて、何のことかお分かり頂けたでしょうか。ことは自身には難しいものは無いように思うのですが、全体として果して何を言っているのか、現代語訳だけからは、分からないように思えます。実は、どんな解説書を読んでも、分かっていません。

まず、出だしの「われを排列しおきて尽界とせり」ですが、これが、なかなかむずかしいように思います。尽界とは、仏教のことばでは「尽十方界」のことで、意味は、宇宙全体のことをさしています。

ここで、難しいのは、宇宙全体と言っていますが、それが、物理的な意味の宇宙のことを言っているわけではないということです。それは、私たち人間が「精神」の働きとして構成している宇宙なのです。心に描かれた世界全体ということです。

「われを排列しおきて尽界とせり」とは、この精神の働きが構成したものを世界とする、ということを行っています。ですから、「われ」には、自分の精神で構成したものの、という意味が含まれています。では、自分が構成したものは、何なのでしょうか。

それは、客観的に言いますと、私たちが生まれてこのかた、経験してきたことの全てです。それは、実は、私の理論では精神の働きとしての「過去」をなす可能性をもったものの全てです。

そうした経験したもので記憶にあるものを配列したものが、つまり「過去」なのです。それを宇宙全体とするということなのです。この構成された宇宙の中の「事・物」が、つまり、時間を構成するということなのです。それは、未来に対して影響を与える可能性をもっているという意味で、時間なのです。つまり、「現在」をなす可能性をもつものなのです。これが、次に出てきている「この尽界の頭頭物物（ずすもつもつ）を時時なりと 見（ちよけん）すべし」ということなのです。

次に「物物の相（あい）礙（げ）せざるは、時時の相（あい）礙（げ）せざるがごとし」ですが、精神的に構成された物物が、互いに妨げ合わないのは、誰でも知っているように、物理的な時間が、互いに妨げ合わない

のと同様だということなのです。

だから、異なる人が、同時に発心することもあり、同じ心で発心を決意する時もある、ということなのです。修行して仏道を成就するのもこれと同様だということなのです。それが「このゆゑに、同時発心あり、同心発時あり。および修行成道もかくのごとし」です。

最後に「われを排列して、われこれを見るなり。自己の時なる道理、それかくのごとし」ですが、もう、これまでの説明でお分かり頂けるのではないのでしょうか。

「われを排列して」は、初っぱなに出てきました。それは、自分の精神の働きで構成した物・事でした。「われこれを見るなり」とは、その物・事を意識するということです。それは、何か行動を起こそうとするとき、あるいは行動を起こした後、それを反省するとき、私たちは、その物・事を意識するのです。それは、まさに行動（行為・生活・人生）そのものです。自己の時なる道理とは、そういうことなのです。生きていること、そのことが、時なのです。

常に為したことを反省し、法に則っているかどうか、自己を客観化する働きが、ここでいう時であり、そして、私たちは、いかに自己を客観化できるかが、問われているのです。それが真の実存を生きるということなのです。

自作詩短歌等選

自己閉鎖と欲望

自らの
欲望のため
十年も
女性監禁
続けたり
うっ積す
欲求不満
はらすため
小二の子供
殺したり
悲しきや
自己に閉じたる
人間の
行くすえ示す
二つの事件

義務を逃れる

欧米人は
使命感をもって
義務を果たす
日本人は
エゴに徹して
義務を逃れたがる

宗教と政治

宗教は
一人一人のところに
働きかけて
人に
幸せをもたらすもの
政治は
社会全体として
幸せを実現するもの
でも
その基礎には
宗教がある

雪庇崩落による死

正しいと思って
間違いを犯す
相対な人間の
さだめと
悲しみ
文部省
登山研修所主催の
雪山訓練での遭難
前途ある若者
二人死亡

平和と平等の実現には

平和も平等も
共に
自分を制し
他者を尊重しなければ
実現できないこと

和を平（は）かるには
自らが凡夫だという
自覚が要り
等しさを平かるには
お布施のところが要る
共に
現代に
失われたこと

老子を拠り所にせよ

中国よ
時代に抗して
いくのなら
そのよりどころ
老子に求めよ

独少年犯罪凶悪化

ドイツでも
少年たちの
犯罪が
増加と同時に
凶悪化
民主主義なら
どこの国でも
同じことだよ

軽くなっている精巣

精巣が
この十年間で
七パーセント
軽くなったと
環境庁

環境ホルモン
ストレス社会
このまま行けば
子どもますます
減ってきそうだ

守れよ人倫

単なる生活習慣に
過ぎない戒律は
守れるのに
普遍的人倫に
反する戒律を
守れない

反省がいる

正しいと
思いて歩む
この道も
間違いではと
反省す
相対なものに
課されしさだめ

自作随筆選

宗教・哲学がいる

二千年になったのを機に、いま、日本では改革の時代を迎えつつあるようです。先日、今後の日本のあり方について、「21世紀日本の構想」懇談会が最終報告書として、「日本のフロンティアは日本の中にある」を小淵首相に提出しました。また、国会では、憲法改正の機運が高まっています。さらに、教育改革国民会議が首相の私的諮問機関として三月に発足するようです。先日も全国紙の新聞の一面全部を使って、それに対する意見を求める広告が掲載されました。

こうした動きの背景には何があるのでしょうか。そのことを正確に知ることなくして、改革は真の改革にはなりません。

結論を先に言いますと、人々が現在の日本がおかしくなっていると感じる裏には、私が常々言っていますように、現代人の「自己肥大・他己萎縮」が存在することは明らかです。でも、それがなかなか他の人には、理解できていないように、思われます。

自己肥大・他己萎縮しますと、他者（社会）定位が困難になります。人間は社会に定位することなくして生きていくことは不可能ですので、そうなりますと、とても不安になります。

その不安を解消するためには、ただ、「自己」という「個」の追求にしかすぎない、「情動」の追求が起こります。食欲・性欲・優越欲や情緒などの追求です。また、見かけに過ぎない定位が起こります。それは、真の信仰ではなく、少数者ではありますが狂信集団への加入であったり、多くの若者がする携帯電話の不必要な携帯であったり、援助交際であったり、暇をもてあそんでいる主婦や年寄りをする、他者の「あらがし」のためのお喋りや井戸端会議などです。共通の話題になっている人の「あらをさがす」ことで、互いの情動の共有が果たされるのです。しかし、それは、積尊が戒められた不妄語、不綺語、不悪口、不両語の各戒律に反するものとなるのですが。

自己の「個」を追求するこうした現象は、すべて「規範や倫理観の喪失」と呼ばれるものにつながっています。それは、他己萎縮でもあるからです。

日本がバブルの崩壊で経済的な衰退が起こり、バブル前の優越感が崩壊し、明治以来の日本人の行動動機とな

つてきました「欧米に追いつき追い越せ」や「富国強兵・殖産興業」というキャッチフレーズが、再び大きな目標になって来ています。それは、「21世紀日本の構想」懇談会の最終報告書「日本のフロンティアは日本の中にある」を読んでみても分かります。

また、多くの人が、他己萎縮を「公」の弱体化として意識するようになって来ていますが、しかし、その公を取り戻すにはどうしたらいいのかが、分かっていないように思えます。

それは、例えば、憲法改正をめぐる意見の多くが、憲法第九条を改正して、解釈法上ではなくて、正式に軍隊をもてるようにしようとしていることや、教育基本法を改正して、愛国心を強めるようにすべきだとする意見に反映しています。またそれは、国粹主義的なマンガや歴史書が売れている点を見ても分かります。

いま上げました、ますます「個」を追求しようとする傾向や、「公」を取り戻すために国粹主義に傾いていく方向は、解決に向かっていくようで、実は、ますます現在の混乱を深める道なのです。どうもそれが、誰にも分かっていないように思えるのです。それは、現状認識が間違っているからなのです。私のことばでいいますと、いま起きている混乱は、自己肥大と他己萎縮という表裏

一体の現象であり、それを解決するには、この関係を一つの事実として解明できる哲学が必要なのです。

我田引水のように恐縮ですが、私は、世界中が陥っている自由主義的民主主義の限界を克服するには、私の提唱する「自己・他己双対理論」が極めて有効であると、考えています。その理由はここでは述べませんが、哲学を欠いた改革案に盛られた「きれいな言葉」だけでは、真の改革にはならないことを戦後制定された教育基本法を例にあげて検討してみたいと思います。

その前文にはこういう言葉があります。「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期する」と。また、第一条には「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し」と。さらに、第二条には「自他の敬愛と協力によって文化の創造と発展に貢献する」と。

これらの言葉で示されている目標が、現在、まさに問われていることは明らかです。最高教育機関である大学の教員すらが、真理や正義よりも、利益と選好を優先させていますし、また、大学以下の学校で起こっている、陰湿ないじめ、暴力傾向の増大、不登校、教師への反抗、などの問題状況を見ますと、教育基本法にいう「個人の尊厳」とか「平和」とか「自他の敬愛」とかは、全くの

お題目にしかすぎないことが、よく分かります。

なぜそうなったのか。この基本法を制定するときの状況をみれば分かるのですが、そこには民主主義以外の哲学がないことに、その理由が求められるのです。

民主主義は、ヨーロッパに生まれた「個」を追求する制度です。それは、「自己社会」を能率よく実現する制度で、その経済的な制度が資本主義なのです。

この制度が、欧米で具合よく発展した基礎には、キリスト教思想がありました。

そのキリスト教は一神教で、唯一絶対の父なる神を信仰します。その愛によって人間は生かされており、一人ひとりの人間と神は、その愛で結ばれていると考えられています。その教えを示したものが、聖書で、神と同様に絶対なもので、キリスト教が確立して以来、誰によっても改定することが許されていません。

このキリスト教は、強烈な他己性を備えています。自己を追求する民主主義への強力なブレーキとなってきました。そのバランスの上に資本主義が発展してきたのです。しかし、欧米にも民主主義の力が、その制度がもつ必然なのですが、強くなり過ぎて、信仰が失われ、ブレーキがきかなくなってきました。

さて、日本に話を戻してみますと、日本にはキリスト

教に相当する教えはありません。明治になって、仏教の教えを排し、キリスト教を模して天皇を絶対化する神道を国教に定めましたが、それも、第2次大戦の敗戦によって捨てさせられました。そして、民主主義が導入されたのです。

しかし、民主主義には、自己（個）の追求にブレーキをかける仕掛けはありません。どこまでも、自己を追求して止まないのです。そのことは、自由競争・資本主義を基盤として、世界的に自己社会に傾いていく傾向をみれば明らかです。民主主義には、その自己追求にブレーキの役割を果たすものがないのです。

これまでは、欧米ではキリスト教が存在しました。それが、強力な他己となって、人は神の義（愛）を人の義として行わなければならない絶対な神の命令を受けていたのです。それは、民主主義の権利の主張にたいして義務を課すのものです。逆に言えば、それまでの神に課された義務からの開放として、権利の主張がなされたとも解釈できます。しかし、そうした精神構造は、日本にはありません。日本に取り戻すべきものは、欧米も失いかけている他己なのです。それは、取りあえず、自分を抑えて他者を尊重する「仁」です。あるいは、聖徳太子で言えば和の精神です。もつと言えば宗教です。

こうした、思想を欠いて、冒頭で述べましたような、二十一世紀の見通しは立ちませんし、また、憲法改正も教育改革・教育基本法改正も決して成功することはないのです。

日本は、島国だったことが幸いして、早くから安定した社会が定着してきました。そこでは、聖徳太子が十七条の憲法で示された和にも反映されています。「宥和」の精神で社会は維持されてきたのです。

私の理論（哲学）でいいますと、それは、意識領域では最下位にあつて、人間の精神の根本をなす「こころ」で、人々が結びついた社会です。自己の「情動」をコントロールし、「人の心を感じるこころ」である「感情」を大切にして、生きていく世界です。

そうした社会では、「個」を捨てたところに「個」が輝き出てくるのです。互いに尊重し合うことで、互いが生き甲斐を感じることが出来る世界なのです。こうした世界は、欧米の「たましい」を建前とする社会より、ずっと本質的に人間的な社会と言えるのです。

そして、それを不動なものにするためには、宗教がいるのです。それは、私の理論（哲学）でいいますと、無意識を磨くことなのです。自己を捨てて、ひたすら聖人の教えを信じ、修行しなければなりません。

釈尊のことば（九〇）

法句經解説

（三〇四）善き人々は遠くにいても輝く、
頂く高山のように。 雪

善からぬ人々は近くにいても見えない、
に放たれた矢のように。 夜

「善き人々」とは、どんな人たちなのでしょう。私は、それは解脱に至った人、例えば、釈尊、老子、ソクラテス、キリストといった四聖のことだと思っています。

こうした人たちは、「遠くにいても輝く」ということです。遠くとは、場所が空間的に遠いというだけではなく、時代を超えて時間的に遠いことも含まれるように思います。

つまり、善き人たちは空間的・時間的制約を超えて、光り輝いている、ということなのです。四聖でいいますと、二千年乃至二千五百年を超えて、しかも地球全体をおおって、未だに光り輝いているのです。

でも、残念ながら、個人一人ひとりが独立して自由に判断すべきだとする民主主義の現在では、だんだんとこうした四聖の人たちも光り輝かなくなってきました。

民主主義では、聖人や偉人の判断基準を単に適用するのではなく、一人ひとりが自分の考えをもち、それに基づいて判断することが奨励されます。聖人や偉人の考えに単純に従うことは、避けるべきこととされるのです。

こうなりますと、他者の意見に従うのは、自分の好きな人の言うこと「選好」であつたり、自分の「利益」になることであつたりするときだけになつて来るのです。その好きな人と言いますのは、同郷だとか、同窓だとか、いつも自分を引き立ててくれる人であるとか、常々気があつて付き合っている人であるとか、といった人で、真に人格者であるとか、修行を積んで常に善を為すような人であるとか、ということではないのです。ここに問題があります。

こうして人々は、正義にかなうかとか、善いことであるかとか、真理であるかとかでは、判断しなくなつてしまふのです。実は、それが民主主義がいただく原理の必然の帰結と言えるのです。

凡夫である相対な人間が、自分の選好や利益を判断の基準にしますと、間違いを犯してしまいます。善を為さず、悪をなしてしまふのです。そう気づかないでそうしてしまうのです。

相対な人間には、判断の基準とすべき絶対な基準がい

るのです。それは、無明の闇を行かなければならない人間にとつての明かりです。それは、人生行路における灯台と言えるものなのです。

それが、善き人が光り輝くということでした。

(三〇五)ひとり坐し、ひとり臥(ふ)し、ひとり歩み、なおざりになることなく、わが身をととのえて、林のなかでひとり楽しめ。

この偈の中には、「ひとり」という言葉が、四回でています。ということは、この偈のめざすものが、孤独主義あるいは個人主義かのような印象を受けるかもしれませんが、そうではありません。個人主義や自由主義は民主主義を支える原理ですが、ここで「ひとり」と言っていますのは、瞑想するためには、ひとりの方がよいからなのです。ひとりで「行住坐臥」に徹するべきだと言われているのです。

キリストも「奥まった部屋に入り、戸を閉めてひとり神に祈れ」と言われています。同じ趣旨です。

この偈を实践した人に、有名な良寛さんがあります。良寛さんは新潟県で生まれ育つて、岡山県玉島で修行し、晩年は郷里に帰つて、山にこもり一生を終わりました。

ときどき里に出て、托鉢をし、子どもと遊びました。能筆で文字をよく書き、よい歌をたくさん残しました。

まさに「ひとり坐し、ひとり臥(ふ)し、ひとり歩み、なおざりになることなく、わが身をととのえて、林のなかでひとり楽し」んだ人と言えます。

でも、こうした価値も、今は殆ど理解されません。現代人のように、他己を弱めますと、ひとりで林の中で暮らすことは、とても耐えられないのです。自分が生きていくことが無意味に思えてきますし、自分を定位するものがありませんか、人がいないと不安になってしまうのです。ここから、コミュニケーションしているわけではなくても、そこに人がいる必要があるのです。ひとが何となく支えてくれそうに思えるのです。また、そればかりを期待しているのです。

でも、良寛さんのように信仰をもっていますと、一人でいても平気です。

よく、日本人は外国に行くと、一人でいることに弱くて、すぐ日本人同志で集まっていると言います。日本人の信仰のなさを示すものと、私は解釈しています。

四国八十八カ所霊場をまわるとき、同行二人と書いた服を着ますが、これは、たとえ一人旅であっても、常にお大師さまといっしょだという意味です。信仰によって

他己を得、孤独に耐えることができるのです。お大師さまは絶対ですので、信じることでそこに足場を得ますと決してぐらつくことはないのです。相対なものに寄り掛かりますと、相対なものはすぐ変化しますから、寄り掛かっている積もりが、寄り掛かれるものでなくなってしまうのです。その相対なものとは、名利(名譽・財産)であつたり、家族・家名であつたり、さまざま欲望であつたりします。そうしたものは、状況によって変化して止まない実に空しいものなのです。でも、多くの人は、悲しいかな、なかなかそれが理解できません。

最後に「なおざりになることなく、わが身をととのえて」ということですが、これがなかなか難しいことです。

人間はどうしても怠情に流されます。易きに流されていきます。「なおざりに」なりやすいのです。

また、「わが身をととのえる」ことも難しいことです。

「わが身をととのえる」とは、教えを守り、戒律を守ることです。最も基本的な戒律である五戒は、不殺生、

不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒、です。また、六波羅蜜は、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、

智慧、です。こうしたものを守ることが、身をととのえるということなのです。どうか皆さんも、守ることをこころがけられてはいかがでしょうか。

後記

一、まだまだ、寒さが続くようです。でも、畑の作物も、雑草もだんだん勢いを増しています。

二、先月の末に、久しぶりに畑仕事をしました。畑を耕運機で耕し、ジャガイモの種を植えました。

三、ジャガイモは、年に二度作れますし、やせた土地でもできます。それに、勝負が早くて、もう六月には収穫できます。最近、さつま芋よりジャガイモの方が食べやすいこともあり、よく食べています。

四、また、入手しました土地は、平地ですが、地目が山林で、一部がはげ、土が流されていますので、植林しました。松の木の小さいのをその土地の中から間引いてきて、移植しました。いまのところ順調です。

五、風呂は、その山の倒れた木（アカシヤが多い）を伐ってきて、わかしています。いつまでもありそうです。

六、道元の時間論（「有時（うじ）」は、なかなか難しいようですが、何度も読みなおして頂ければ、何か得るものがあるのではないのでしょうか。

七、私たちは、客観の世界（物理的環境）の中に住んでいるようですが、それに意味を付けるのは、他ならぬ人間です。環境は、すべて人間の精神が構成した意味空間であり、時間空間なのです。ですから、それは、自分自

身でもあるわけです。それに気づけば、環境は大切にしなければならぬのですが。人間だけではなく、物（物質）にも、生き物（生命）にも、尊厳があります。物や生き物を好き勝手に操作したりせず、大切にすることが、すなわち、人間を大切にすることなのですが。なかなか理解されないようです。

八、三月はじめ、風邪からウイルス性大腸炎を起こしてしまい、一週間下痢が続きました。生まれて初めての経験でした。ずっと水のような便が頻繁に出て、何も受け付けませんでした。二度点滴を受けました。いろんなことを経験させて頂きます。皆さんもお気を付け下さい。

| | |
|--|--|
| 月刊 こころのとも 第十一巻 三月号 （通巻 一一三三号） | 平成十二年三月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（じょうせい）</small> |
| 本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660 | |

